

第一回学会状況報告

山崎智子

第一回の高知女子大学看護学会を成人の日に開こうとの決定をみたのは、50年夏の暑い頃だったと記憶しています。それから約1カ年、学会も無事に幕を閉じ、ここにようやく集録を出版することになったわけですが、学会当日の前後を想いおこし、その一端を御紹介することといたします。

学会前夜は祭りさながら、当日のために馳せ参じた諸姉もかり出し、会場準備に遺漏なきよう心がけ、ねじり鉢巻きでの追込み合戦を演じたことでした。

生花の活けこみでは、軽三輪で運びこまれた、松竹梅の大木にふりまわされ、悪戦苦闘されたのは〇〇先生。

会場の隅から隅まで、へばりついている綿ぼこりを丁寧に掃除して下さったのは、馳せ参じ組の〇〇さん。

十年後にはひとかどの書家としても大成するであろうとの声をしり目に、プログラム書きに専念したのは〇〇さん。

そして会場の完全冷房を心配して、ストーブを西から東から、かき集め配置したのは〇〇さん。……等々縁の下を支えによって、後は当日の晴天をのみ祈ることで、前夜祭は幕を閉じたことでした。

翌くる学会当日は、私達の期待通り晴天に恵まれ、まことに好調な門出となったわけです。ところが……です。定刻20分前になっても会員の足は？。15分前、ポツポツ。10分前……と、時計の針とニラメッコすることしばし、相変わらずの女子大ムードとあきらめはじめた頃、ようやくどっと参集、遠東の友、なつかしの友と、会場のあちこちで感激？の渦がつけられ、なかなか解けそうにもない気配、しかしここで社交場と変じては、一大事とばかり、定刻に遅れること〇分にて、学会規約審議へとプログラムの一頁はめくられた次第でした。

そして規約原案の説明につづき、審議もすんなり経過し、和井学会長の誕生をみました。次いで学会長による開会宣言、挨拶、更に安中学長の祝辞、和井先生の特別講演とつづき、和井先生は一人何役もの出番が続きました。

ここで昼食の時間となったわけですが、当日の日帰り予定者が多いとみており、昼食会を開くべく段どり（宮中晩餐会の如き陣どりでの）パーティその1を演出したのは〇〇さん。しかしこのなごやかな会もゆっくり歓談のいとまもなく、あわただしく午後の部のはじまりとなりました。

研究発表の司会は2回生の野崎、松尾の御兩人、その滑り出しには後続発表者をして、あんなにはとても……と肝を冷えせしめた模様でした。

司会者の適切な寸評を加えた進行によって順調に進むかに見え出したが、後半は持ち時間の計算ちがいがあって、終りには、はしょれ、とばせのサインの飛ぶ中で、スピードアップに心がける人、それでもしっかり発表する人……とりどりの中で、やきもきしながらもとにかくプログラムの総てが終了しました。

夜の部パーティその2は半数に減りましたが、なつかしの面々とともに学生時代の思い出や現況に花を咲かせ、時の経つのを忘れさせました。

北は山形、新潟からと、また卒業以来はじめての方々を迎えたわけでしたが、同じ道を歩むものとして、距離も時間も一挙に圧縮された感じでした。

年中行事の一つとなるこの学会を年々充実したものとして育て、発展させてゆかねばならないと痛感させられたのは私一人ではありませんまい。

第二回高知女子大学看護学会の呼びかけ

高知女子大学看護学会運営委員長

森 田 道 子

盛夏の候、皆様方にはその後ますますご清栄にて各々の看護の分野でご活躍のおことと存じます。今、日本の看護界では制度や教育の大きな問題を抱えながらも来年日本で開催されますICNの大会にむけて努力が続けられております。本学衛生看護学科も創設以来25年を経過し、本年3月第22回の卒業生を送り、同窓生417名となりました。当科の発足当初は暗中模索の状態で学生とともに試行錯誤しながらあゆんだ長い道でしたが、25年を振り返りまして今更のように歴史の重みを感じております。

先に、当科20年のあゆみを発刊いたしました当時より、今回は看護論文集を、さらに看護学会発足をという声が高まり、関係者並びに同窓生有志の方々のご努力により、ようやく本年1月15日成人の日に高知女子大学看護学会を発足させることができました。

看護の学問的レベルの向上と、よりよい看護を願って、当衛生看護学科の社会的役割を果たすべく看護教育、臨床看護、地域看護、学校保健などの各分野の方々より日頃の研鑽の成果が発表され、又会場の方々との熱心な意見交換もあり、予想以上の参加者と評価に感激するとともに意を強くいたしました次第です。

第二回高知女子大学看護学会は役員会で本年12月27日に開催することになりました。学会の内容といたしましては各分野からの一般研究発表と、看護教育のあるべき姿を考えると云うことで